

1

21世紀が始まって3年になる。20世紀と21世紀は人間がつくりあげた時間的区分でしかないが、100年を単位として文化と歴史を検討、反省し、展望しようとする人類と文明の発展のために必要であるように思われる。他の国でもそうだろうが、20世紀の韓国は、極めて厳しい浮沈と栄辱によって織りなされてきた。19世紀末に開港した結果、20世紀初頭に韓国は列強の角逐の場となり、その後すぐに日本の植民地へと転落し、40年もの間、植民地統治を受けた〔1905年の日本による保護国化から数えると40年になる〕。1945年、日本植民地統治から解放された韓国は南北に分断され、その結果、1950年、韓国戦争〔韓国ではこのように呼称する。勃発日にちなんで「6・25」ともいう〕で東西冷戦の試験場となった。1953年、戦争と共に南北分断状況は膠着状態に入っていき、北韓〔韓国では北朝鮮のことをこのように呼称する〕は閉鎖した社会として孤立し、一方、南韓は開放された民主社会として発展につぐ発展をとげた。1960年<sup>サーイルグ</sup>4・19学生革命〔<sup>イ・スンマン</sup>李承晩大統領が退陣した〕は、韓国人の自由と権利に対する意識を呼び覚ました。1961年の軍事革命〔<sup>パク・チョンヒ</sup>朴正熙によるクーデタ。起こした日にちなんで「5・16」ともいう〕は近代化の主張の下、韓国の産業化を主導した。経済的成長に土台を置いた軍事政権は、1972年に維新憲法を制定し、間接選挙で長期にわたる政権維持を試みたが、1979年の10・26事件〔<sup>パク・チョンヒ</sup>朴正熙の暗殺事件〕で、民主化の要求に直面した。1980年、光州事態〔光州での韓国軍による光州市民虐殺事件〕を引き起こした新軍部〔<sup>チョン・ドゥフアン</sup>全斗煥が主導した〕は政権を掌握し、軍事独裁を継続させた。しかし、民主化を要求する韓国人の熱望を断ち切ることができなかった新軍部は、1987年、6・29宣言を契機に、大統領直接選挙を容認した。1993年には文民政府〔<sup>キム・ヨンサム</sup>金泳三政権〕が誕生し、1998年、国民政府〔<sup>キム・デジュン</sup>金大中大統領による政府のキャッチフレーズ〕が立ち上がった。2003年には参与政府〔<sup>イ・ムヒョン</sup>盧武鉉大統領のキャッチフレーズ〕が政権を掌握したことで、韓国は自由な民主主義を実現している。その間、韓国は経済発展に成功し、農業国家から工業国家へと変貌をとげ、貿易収支で世界第12位の国家となった。東ヨーロッパにおける共産体制の崩壊と共に、南北間の交流がなされ、軍事的緊張が緩和された状態である。皆さんもよくご承知の通り、こうした韓国の歴史に言及したのは、韓国小説の変化がそうした歴史と関連していると考えからである。

私が今日、この半世紀の間、韓国小説が歩んできた道を概観して振り返り、ここからいくつかの問題点を指摘しようとするのは、一人あたりのGNPが100ドルから10,000ドルに成長した変化の中で、韓国人の生活と世界に対する意識と態度にどのような変化があったのかを考えていこうとするためである。それは、今日の韓国文化の状況を点検し、新しい世紀の韓国文学を展望してみるために、触れるべき課題である。なぜなら、この半世紀の歴史が激動と変化の歴史であり、今日の文明が交通と通信、知識と表現において革命的転換をしてきた文明であるといえるならば、文学は、その中で存在する精神のゆるやかな変化をあらわしているからである。特にパーソナル・コンピューターや携帯電話、衛星放送やDVDの一般化により、全ての価値が速度におかれていくのにもなって、奥深い反省や広範な思惟を必要とする文学は、大衆から関心をもたれないという危機に置かれており、その位相がゆらいでいる。全てのものが速度の競争をおこなっている現実の中で、速度の本当の意味は何なのかと問い、反省する文学は、ともすると時代錯誤的で、反文明的な存在であると受け止められるかもしれない。しかし、文学は、人類の歴史において、問いかけと批判という役割を通して歴史に参与してきた。この半世紀の間、韓国社会が変化したことと同様に、韓国小説も様々な変化を経験した。小説の素材が変わり、技法が多様になり、言語が変わった。そのことにより、作家の感覚と想像力もまた変化した。そうした点において、小説は、それを生み出した社会の変化に相応する変化を経験するのである。

## 2

解放直後、大部分の韓国小説は、南北分断の深刻さと戦争の脅威に対して意識することができず、むしろ日帝時代の苦痛の記憶を想起させ、解放の感激を歌うにとどまっていた。それは、解放の感激から脱することの出来ない小説が、歴史と現実に対して、深くあるべき反省から目をそらしたという事を意味した。

韓国の解放が真の解放となるためには時間が必要であるという視点を見せる小説としてあげられるのは、1947年に発表された蔡萬植<sup>チェマンシク</sup>の「少年は育つ」程度である。この作品は、植民地韓国で生きることができず、間島<sup>カンド</sup>〔旧満州の朝鮮国境沿いの地域〕に移民として行った家族が、貧困と人種差別という厳しい条件の中で暮らした後に解放をむかえ、帰国するという内容である。主人公オ・ユンソ一家を始めとした間島移民たちは、解放が彼らにとっては窮乏からの解放を意味することだと期待した。しかし、彼らの期待は、治安の不在状態の下、満州の人々の略奪という行為から、崩れていってしまった。妻と子供一人をなくし、残りの家族とも生き別れになってしまったオ・ユンソは、家庭の破綻を経験する。二番目に彼が体験した悲劇は、韓国が南と北に分けられ、南は民主主義を、北は共産主義を掲げ、二つの韓国という分断の痛みである。それは、外からの勢力を背景にしながら二つの政府が、緊張関係の中で、遠からず戦争を行って東西冷戦の渦に巻き込まれることを予見した。三つ目に提起された問題は、日帝時代に親日派であった人々が、彼らの既得権を享受し、新しい社会の支配層を形成した一方で、間島から帰国した人々を蔑視と監視の対象とした事実である。四つ目に提起された問題は1945年の解放を、独立を成し遂げていない不完全な解放であると評価している点である。当時の韓国が日帝の植民地状態から解放されたことは事実ではあるが、外勢の干渉を受けない、真の独立を成就するまでは、多くの時間と努力が必要であると予見している。こうした観察から、作家・蔡萬植の深くて広い世界観を垣間見ることができる。彼は、歴史の中で、一つの問題の解決を、また他の問題の始まりであると見る、悲観的世界観の持ち主である。その後の韓国史は、不幸にも彼の予見通り進んでいる。

1950年の韓国戦争は、解放がもたらした分断が、またさらなる分裂と悲劇の始まりであることを証明している。北韓の南進に始まった同族争いである韓国戦争は、3年の間、300万名余りの犠牲者を出し、韓国人の生を芯から揺るがした。韓国戦争は、韓国人にとって、故郷の喪失、家族の解体、残酷な殺戮の経験という、未曾有の変容をとげ、人間に対する信頼を喪失させ、伝統的な農耕社会の崩壊をもたらした。戦争は、家族、階層、社会、風俗などを激しくゆさぶり、農業社会の人間関係を破綻に追い込んでいった。個人的には、理念の選択によって生死の岐路をさまよわせ、社会的には階層間の移動がなされ、国家的には、国家が廢墟状態におちいった。こうした惨憺とした現実の中で、50年代の文学では、分断と戦争によって引き起こされた問題と現実を取り上げた小説が生み出された。金東里<sup>キムドンニ</sup>、黄順元<sup>ファンスン元</sup>、金聲翰<sup>キムソンハン</sup>、張龍學<sup>チャンヨンハク</sup>、孫昌涉<sup>ソンチャンソプ</sup>、徐基源<sup>ソギウォン</sup>、吳尚源<sup>オサンウォン</sup>、李浩哲<sup>イホチョル</sup>に代表される50年代文学は、6・25戦争〔=朝鮮戦争〕を素材にし、伝統的価値の破壊、土俗的な社会の崩壊、実存的自我の発見を扱った。彼らは、登場人物がおかれている極限状況の中で、人間として自身の命と尊厳を守るため、その代価を徹底して支払う現場を提示し、そのことを通して戦争の残忍性を告発し、自身が生きている時代の痛みが、その他のどの時代のものよりも大きいということを証言している。彼らは、戦争の現状の生々しい姿を示すこと、つまりその中で苦痛を受けている個人の姿を、赤裸々に表現することを文学の役割と考えている。しかし、彼らは、社会が志向しているイデオロギーを検討することや、戦争の意味を問うこともできず、また、未来社会を構想する余裕も持たずに、歴史と現実の被害者として証言するのみだった。

こうした点からいえることは、彼らが考えた小説とは、現実を再現し、その現実の不条理を告発する事実主義的性質を持つことしかできなかったということである。しかし、彼ら作家達は、彼らの文学を事実主義と呼ぶよ

りはヒューマニズムと呼ぶことを選択し、一部には実存主義と唱えようとする者もいた。彼らが、ヒューマニズムを主張したということは、すなわち、人間の本性が土地から離れた状況で、人間の尊厳性を守ろうとする彼らの文学的努力の表現である。彼らが実存主義文学を唱えたことは、彼らの登場人物が置かれている状況が、極限的であり、その選択が彼らの運命を左右し、そうした彼らの存在の有限性についての悲劇的な認識が、作家達の文学を可能にしていたのではないだろうか。戦争という不条理な現実の中で生き残るということは、ある意味では偶然であり、ある意味では選択の結果なのだが、いずれの場合のいっても、命の価値を肯定的に捉えようとするのではなく、意味の無い否定的なものとして捉えようとした。彼らが生きている世界が、飢えと恐怖によって抱えを支配されているのは戦争によってであり、彼らの中の一部が金と権力を掌握したことは、戦争の混乱を利用し、その恩恵を受けたからである。登場人物達の生は、彼らの選択によって達成されたものではなく、したがって自身の生に対する責任も背負う必要がない。戦争によって、生と死の分かれ道をさまよう急迫した現実を生きていた50年代の作家達は、戦争の原因に関する問いかけをする余裕もない。また、戦争によって、強制的にどちらかを選ぶことを強いられた状況の中では、こうした問いかけをすること自体がぜいたくなことに見えたといえるかもしれない。

### 3

分断の現実がイデオロギーの対立として把握され始めたのは、4・19革命以後、<sup>チェ・インフン</sup>崔仁勳の『広場』からであるといえる。4・19学生革命は、たとえそれが、5・16軍事革命によって挫折することとなっても、4・19世代は個人を歴史の被害者としてのみ認識していたそれ以前の世代とは違い、歴史と自由の主体として認識し始めた。4・19学生革命は、それがもたらす政治的意味よりは、象徴的意味がより大きかった。4・19革命は、当時の若い世代に、植民地時代に教育を受けたそれ以前の世代において見られた前近代的思惟や敗北主義的歴史観を克服する契機を準備したのである。4・19革命が韓国史において初めて下からの変化を成功させたことによって、歴史が統治者や外勢によって揺り動かされたという宿命論的、他力本願的な観点から脱却し、韓国の歴史が韓国人自身の意志によって作り得るのだという自信感を韓国人に植え付けた。この自信感が、その後の社会的、経済的、科学的、文化的、技術的發展に心理的な基礎を提供した。4・19世代は、解放後に教育を受け始め、異民族の政治的、文化的影響を直接的に受けていない世代として、韓国の近代史と民主主義の理念の教育を受けて育った。彼らは、韓国語の本を読んで考え文章を書いた初めてのハングル世代として、植民地教育を受けていない自負心と、民主主義の歴史を新しく創造したという自尊心を持った世代である。

60年代の文学は、これら4・19世代によって主導された文学であり、彼らの生が未だに貧しさから抜け出せてはいなかったが、世界の中で個人が享受しなければならない自由と権利が何であるか、最初に目覚めた世代の文学である。彼らは、戦争が当時の世界を支配する二つの理念対立の産物であり、そこで体験した個人の悲劇的な生が、世界の中での悲劇的な存在としての自我を認識させる。個人と、その個人を支配している社会との間で和解ができないという対立と葛藤を、人生の悲劇的性質であると把握した60年代文学は、人間らしい人生を主張した50年代のヒューマニズムでも、命の意味を問う実存主義でもない、いわゆる個人主義文学をつくりあげた。個人の意味と、自らのアイデンティティーについての自意識を持ちながら生きるということが、どれほど惨憺としたものだったかという悲劇的状況を分かせてくれる<sup>キム スンオク</sup>金承鉦、<sup>イ チョンジュン</sup>李清俊、<sup>ソ ジョンイン</sup>徐廷仁、<sup>パク テスン</sup>朴泰洵等があげられる。また、韓国戦争の意味について、積極的な把握と理解を通して、戦争の悲劇的状況についての記憶を蘇らせ、生存のために数々の侮辱に打ち勝った個人を描いた<sup>キム ウォニル</sup>金原一、<sup>キム ジュヨン</sup>金周榮、韓国の民族史の悲劇的な現場としての戦争を生の一般的な状況に代替している<sup>ホン ソンウォン</sup>洪盛原の小説などは、巨大な状況下で矮小化された個人の発見を中心に展

開されている。彼らは、文学に対して自意識が強く、文学的技法の新しい追求を通して、彼らの精神世界を文学的に形象化し得たという自負心をもっている。彼らは、当時の韓国史を再定立していこうとする歴史学の結実と、韓国学の研究熱にも助けられ、韓国人のアイデンティティーについての意識をもち始めた。また、解放後に学校教育を受けた最初のハングル世代として、韓国語を文化語に発展させることができるのだという展望の中から、それ以前の世代とは違う感受性で表現し、韓国小説にいわゆる「感受性の革命」をもたらした世代である。彼らは、個性的で、語法が思慮深く、構成力に関しても卓越しているが、その一方で、彼らの文学的特長としては、一段落が長く、要約することが難しくなった。彼らは、それ以前の世代に比べれば極めて小さな問題を丁寧に見ていく視点を持ち、彼らの技法はモダニズムに近づいていった。これらの文学の特質である矮小性により、60年代後半のある評論家は、これらの文学を小市民の文学として規定しながら、新しい市民文学論を提唱していった。

#### 4

市民文学論の提唱は、個人主義文学に対抗する方式の模索でありながら、他方では5・16軍事クーデターによる支配権が強化された軍事文化に対抗する新しい文化の提唱であった。いわゆる参与論によって主張された市民文学論は、70年代に民衆文学論、民族文学論として進められながら、文学の社会的、歴史的役割を強調し、文学人の抵抗精神を鼓吹し、韓国社会の民主化に大きな貢献をした。韓国社会の民主化は、これら参与論者だけではなく、多くの自由主義文学論者たちの支援を受けた。自由主義文学論者達は、文学の現実参与的な性質を認めながらも、文学の自立性を守らなければ、文学も結局はイデオロギーの道具に転落し、文学の破滅をもたらすと主張した。実際、韓国小説は、この後、二つの重い課題を背負うことになった。韓国文学は、一方で軍事政権の政治的弾圧に対抗し、産業化過程における疎外と良心の問題も提起することによって、軍事政権の統制の下におかれていくこととなった言論の代わりに、大衆伝達と現実認識の任務を遂行した。他方で韓国文学は、文学の時事化と当代化、道具化が文学の自立性を損なうこととし、それを警戒して、文学の本質と役割についての根源的な問題を提起し、変化する現実に対応する文学の様式を開発し、文学本来の姿を失わないようにした。参与文学論と自由主義文学論が担ってきたこの二つの役割は、今日の韓国文学が30年の軍事統治の中で、存続することができ、読者達の興味を引き続けることができた力である。

70年代の韓国社会は、政治的には三選改憲〔大統領の三選を可能にした改憲〕と、維新の宣布を経て、軍事政権の統制が強化された。また、経済的にも産業化の新しい段階にさしかかった。この時代の文学は、こうした状況に対処すべく、そのような方法を模索せざるを得なくなった。その最初の対応の方法は、権力の腐敗と現実の不条理を告発する文学であり、<sup>キム ジハ ファン ソギョン</sup>金芝河、黄哲暎らの作品に代表される。二番目の対応方法は、農村の疲弊と都市の場末の貧困を扱った<sup>イ ムング バク テスン</sup>李文求、朴泰洵の作品に代表される。三番目には、産業化の渦中で疎外され犠牲となった生を扱った<sup>ユン フンギル チョ セヒ</sup>尹興吉、趙世熙、<sup>チョ ソンジャク</sup>趙善作の作品があげられる。四番目としては、近代化されていく過程で、都市の中産層の人々も持っている、虚偽意識や偽善的な世界を扱った<sup>チェ イノ チョヘイル ソン ヨン バク ワンソ オ ジョンヒ イ チョンジュン</sup>崔仁浩、趙海一、宋影、朴婉緒、吳貞姫、李清俊、<sup>ソ ジョンイン</sup>徐廷仁の作品があげられる。70年代文学の特徴は、政治的な抑圧が強化されればされるほど、直接的な抵抗をする文学の声が大きくなっていった一方では、政治的な敗北意識にも関わらず、文学はどうあるべきなのかといった文学の内面的な省察が深くなっていくようなかたちであらわれた。

こうした変化によって生み出されたのが大河歴史小説である。<sup>パク キョンニ</sup>朴景利の『土地』、<sup>キム ジュヨン</sup>金周榮の『客主』、<sup>ホン ソンウォン</sup>洪盛原の『南と北』、<sup>ファン ソギョン</sup>黄哲暎の『張吉山』に代表される70年代の大河小説は、当時の歴史的条件や現実が、朝鮮王朝時代から韓末を経て日帝時代にまでおよぶ民族史の一つの流れであるという認識をもつことができるように、民衆的な生き方を明らかにした。70年代の大河歴史小説が従来歴史小説と違う点は、それが被支配階層であった

庶民達の生きた姿を中心に展開しているということである。王朝中心の支配階層の英雄を主人公として前面に立たせる伝統的な歴史小説と違い、これらの70年代の大河小説は、歴史の中で名も取りざたされない民衆達を主人公にし、彼らの話を素材としてつくりあげた。こうして70年代文学は、軍事政権の暴圧や産業社会からの疎外が、単純に当時の問題として把握されるものではなく、何百年もの歴史の脈絡から理解することができることを示した。歴史的に見ると、支配階層と被支配階層間の葛藤が庶民達の悲劇的な人生の根元として作用し、今日の惨憺たる歴史の源流として作用している。彼らの文学は、軍事政権の強化に対する民衆の抵抗に歴史的根拠を提示し、当時の社会の惨憺たる現実にもかかわらず、民衆達が雑草のようにその生命力を失わないことを提示した。それは、彼らの文学が民衆的な生命を代弁することによって、暗澹たる現実にも関わらず、希望をもち続けていこうとする役割を担ったといえる。

70年代文学のもう一つの特徴であった農村小説と都市貧民小説についても、民衆の苦痛を伴う生活の歴史的な根元を明らかにした大河小説と同じ脈絡に置かれている。李<sup>イ</sup>文<sup>ムン</sup>求<sup>グ</sup>の作品のように、農村を扱った小説では、産業化の中での疲弊していく農民の姿と、農業社会の伝統的な価値が崩れていく農村の姿が描かれている。また朴<sup>パク</sup>泰<sup>テ</sup>洵<sup>スン</sup>のような都市貧民小説は、農村から働き口を求めて都市に行った庶民達が、そこで根を下ろすことができずに場末で徘徊する悲劇的な生活の現実を描く。これらの小説には、産業化の中で疎外され根無し草となった人々の苦しい姿を通して、幼年期の絶望的な体験、選択の問題ではない生の意味の問題、韓国の農村と伝統社会の崩壊の様相などを示すと同時に、近代化の結果膨張していく都市の姿をあらわにしている。登場人物たちは、都市、特にソウルのはずれで生活をしていくことによって、近代化された社会の中にもう一つの疎外階層を形成した。彼ら疎外階層が、家のない悲しみをかみしめながら、工場の中で、低賃金で働く労働者としての生活を営んでいた時、韓国社会は新たな問題に直面することになった。それは、趙<sup>チョ</sup>世<sup>セ</sup>熙<sup>ヒ</sup>によって「こびと」として象徴化されたちっぽけな個人が、不当な待遇に対して抵抗しようとしたが全て失敗し、近代化のなかでも、自分達の社会が生きがいを感じられる社会だと考えられないという不満の蓄積現象をもたらした。登場人物たちが場末で根無し草のまま生きるほかない理由を、分断と戦争の被害者として描いた趙<sup>チョ</sup>善<sup>ソン</sup>作<sup>ジャク</sup>や趙<sup>チョ</sup>海<sup>ヘ</sup>一<sup>イル</sup>、支配者たちの傲慢と雇用者の抑圧によって絶え間なく搾取される近代化の虚構性を描いた趙<sup>チョ</sup>世<sup>セ</sup>熙<sup>ヒ</sup>、そしてこうした虚構性に抵抗することが無謀な挑戦にすぎないという、みじめな人生の姿を描いた尹<sup>ユン</sup>興<sup>フン</sup>吉<sup>ギル</sup>らの作品は、文学が、支配され、疎外された重苦しい人生を生きた人々を存在化させ、表現化させることができることを立証した。このように、不当で不条理な生にもかかわらず、政治的に維新が宣布され、軍事政権の弾圧が強化されると、金芝河は民衆文学を主張しながら、その生命力を抵抗の力として表出していった。

## 5

70年代末、独裁者の没落とともに、ソウルの春を歌う頃、韓国社会は20年前の挫折を再び経験させられた。いわゆる、光州事態に表される新しい軍事政権の登場は、ようやく政治的圧力から自由になった韓国小説に、新しい暗黒の幕をたらしめた。ここで、特徴としてみられるのは、80年代初めの不毛状態を越えていく小説に、新しい気運が芽を吹いたという事実である。それは、李<sup>イ</sup>清<sup>ジョン</sup>俊<sup>キム</sup>、金<sup>キム</sup>原<sup>ウナ</sup>一<sup>コル</sup>、朴<sup>パク</sup>婉<sup>ワン</sup>緒<sup>ソ</sup>、金<sup>キム</sup>周<sup>ジュ</sup>榮<sup>ヨン</sup>、玄<sup>ヘン</sup>吉<sup>ギル</sup>彦<sup>ヨン</sup>、趙<sup>チョ</sup>廷<sup>ジョン</sup>來<sup>ネ</sup>、李<sup>イ</sup>文<sup>ムン</sup>烈<sup>ニョル</sup>、林<sup>イム</sup>哲<sup>チョル</sup>佑<sup>ウ</sup>等の小説に表れているような悲劇の原因探し、金<sup>キム</sup>源<sup>ウオ</sup>祐<sup>ヌ</sup>、李<sup>イ</sup>仁<sup>イン</sup>星<sup>ソン</sup>、崔<sup>チョ</sup>秀<sup>ス</sup>哲<sup>チョル</sup>らの小説に表れているような新しい形式の模索、ユ・スナ、金<sup>キム</sup>永<sup>ヨン</sup>顯<sup>ヒョン</sup>、金<sup>キム</sup>香<sup>ヒャン</sup>淑<sup>スク</sup>、鄭<sup>チョン</sup>道<sup>ド</sup>相<sup>サン</sup>、金<sup>キム</sup>仁<sup>イン</sup>淑<sup>スク</sup>等の小説に見られるような民主化運動の権利の模索などである。60年代には、父親世代がソパルチザンや左翼であったという事実は、表に出すことができずに病んできた傷口であった。まさにこうした隠蔽が80年代の暴力的な状況を可能にさせたことを明らかにするこれらの小説は、一方で、リアリズム技法の拡大により70年代に生み出された大河小説を一層発展させ、他方

で、こうした暴力の時代に文学とはどうあることができるかという、文学の位相に関する深い懷疑と共に、よりモダニズムに近い実験小説を試みようとした。また、もう一方で、産業化の不条理を告発した消極的な労働小説から民主化のため闘争し、悪徳企業主に対して権利を主張する新しい形式の労働小説を流行するようになった。80年代初頭の光州の悲劇における経験にもかかわらず、世界的な三低現象〔低賃金、低原料費、低為替レート〕のおかげで急速な経済発展をとげた韓国社会は、労働者達が労働人口の8割を占めるようになり、先進国型労働組合運動の自由を要求するようになった。光州の民主化運動の真相を明らかにし、民主化をしなければならないという主張と、労働運動を通じて労働者の権益を確保することにより、平等社会を構築しなければならないという主張を意識化させた文学は、労働者・農民を社会改革の主体として認め、彼らのために服務しなければならないという労働者主義の立場を取ったりもしているし、その一方で、文学の自立性と専門性を守らない文学は道具化され捨てられ、文学の死をもたらすのだと文学主義者の立場をとったりもしていた。

ここで指摘しなければならないことは、政治的に抑圧構造にありながら、経済的には自由構造にあるということにより、様々な予想もされなかったような文化が誕生していったという事実である。2つの重要な文学季刊誌を始めとして、多くの文学誌が廃刊されたという恐ろしい状況の中で、いわゆるムック誌〔Magazine+BOOK=不定期刊行の雑誌〕文化が誕生したことは、ある意味当然の結果であるといえる。このムック誌の誕生は、それまで公式機構を通じて登場していた作家達を、非公式に量産することによって、誰もが作家になることができるようにし、まるでゲリラ作戦のように文学を反政府運動の先兵としていった。この時期は、ある意味、韓国文学の危機だったと言える。文学とは、才能ある個人の分野ではなく全民衆の領域であると主張し、文学のジャンルを解体して集団で創作することを標榜し、文学が社会変革の主体となるべきだという動きが大きく台頭してきた。光州事態や軍事政権のような強権によって言論がしっかり役割を果たすことができず、ムック誌のような媒体を通じた文学が軍事政権と激しく対立し民主化運動の火花が散らしている時、誰も文学の危機といった「悠長な」意見を言うことができなかつた。しかし、労働者主義が労働者に便乗して自らの小市民性を隠蔽しようとする人の思惟構造であると考え、黙々と文学を守って文学の位置を確立させようとした作家達は、光州事態や、新軍部の台頭が全て分断の傷痕により可能であったという事実を表明した。それは、一方で分断という現実の克服のために痛々しい過去をさらけ出し、知識人たちが抑圧を受ける状況が韓末から継続しているのだということを掘り起こす文学的努力が、『夜明け』〔洪盛原〕、『未忘』〔朴婉緒〕、『いつも青い松』〔金原一〕、『英雄時代』〔李文烈〕、『父の土地』〔林哲祐〕、『太白山脈』〔趙延來〕等の作家達によってなされ、他方で、絶望的な状況に対して、希望的な言語ではなく絶望的な言語によって悲劇的な人生の姿を表現する知識人の小説が、『見なれぬ時の中へ』〔李仁星〕、『話頭・記録・化石』〔崔秀哲〕の作家達によって生み出された。80年代以前の文学の特徴として与えられた条件として考えられていた分断の問題、軍部独裁の問題、産業化の問題が、80年代においては、韓国人の生活全体を規制、抑圧する条件として作用していることを論理的に理解し、それらを現実的に打破していこうとする動きが現れたことが、80年代文学の特徴として記録されるに値する。それは、以前までは悲劇的運命として受け入れてきた現実を克服の対象としようとする態度であり、したがって分断を全ての問題の根元とみなし、統一を全ての問題の解決として見る態度であった。そうして、軍事政権が主張している親米反共政策に逆行することが分断現実を克服する道であると考え、全ての実践的な文学はこうした方向へと進んでいった。闘争を前面に押し出したこうした実践的な文学は、実際、文学というよりはかけ声に近いものだったが、それが闘争の対象としてみなす軍事独裁の不当性のため、彼らの文学に異議を唱えるのは難しい状況であった。アウシュビッツ以後文学は存在し得るのか、という懷疑が文学人自らの心の中を占めるにいたること以上に、文学の危機はあり得るのだろうか。

## 6

幸いにも、6月抗争と共に軍事独裁政権が崩れ、文民政府が成立していく過程において、東欧圏までもが倒壊したことにより、この30年間、外的な現実と戦ってきた文学は、自らの姿を振り返る機会を得ることとなった。それは、分断の克服を社会主義的な展望に期待できないとする事実を確認するようになったことで、社会主義が軍事独裁を打破できる唯一の方法として考えられていた理論的根拠を喪失した。そうした天から、90年代の文学は、文学の新たな転機を、一世代前の60年代文学が経験したのにも近い変革をもたらすほかなかった。独裁政権を民衆の力により追いやり、新しい文民政府が成立させることにより、自由と権利を闘うことによって得られるという経験を、またその間の経済発展により急速に産業化したという現実が新しい大衆媒体の活用を可能にしたのだが、これは韓国文学の状況を変えた。そうしたことは、一方で、文学の外にあった現実と、その現実の中にある容易に見えない意図を明らかにし、それを批判的に克服しようとする文学を生み出した。また、産業化がもたらした文明の利器に自身を委ねることによって、それがもたらすあらゆる類の軽さを享受する文学が登場した。前者の場合、苦しかった時代の社会的な変化と政治的な抑圧にもかかわらず、我々が生きている生活空間が生きるに値する場なのかという問題と、その問題を文学的に提起する方法論的な考察を通して、文学に対する反省を促した60年代文学の伝統を創造的に継承したものであった。後者の場合、これまでの文学的方法では今日の変化を受け容れることができず、その中で変化していった文学の位相を定立し得ないという自覚の下で、映像媒体を利用することを知っている全く違う文学的伝統を創造したのである。一世代前の先人達は、彼らの肉親が巻き込まれた6・25という歴史的な痛痕を「暗い実存的体験」として胸に抱き、それを意識化するために、辛い闘いを始めた。彼らに並ぶ作家としては、80年代にこうむった傷の痛みを記憶を変化していく現実の中で距離において意識化した崔 籟<sup>チェ ユン</sup>、林 哲佑<sup>イム チョルウ</sup>、李 滄東<sup>イ チョンドン</sup>、具 孝書<sup>グ ヒョソ</sup>、実践的な生活に身を投じたが、若い日の情熱が荒涼たる悲しみへ変わり、挫折に当りした人生の悲劇的な現実を描いた金 永顯<sup>キム ヨンヒョン</sup>、孔 枝泳<sup>コン ジヨン</sup>、宋 基元<sup>ソン キウオン</sup>、朴 日文<sup>パク イルマン</sup>、後期産業社会の消費性、感覚性、即物性を描いているハ・イルチ<sup>ハ イルチ</sup>、李 舜源<sup>イ スノ</sup>、李 仁和<sup>イ イナ</sup>、蔣 正 一<sup>チョン ジョンイル</sup>、河 在 鳳<sup>ハ ジェボン</sup>、申 京 淑<sup>シン キョンスク</sup>の小説などは、我々の小説の現段階を示す重要な作家である。これらの小説は、すでに60年代から作品を書ききた先人作家達の様々な傾向を照らして見る時、彼らの世代の問題を受けながら、彼らの世代の個性が表れた作品傾向を帯びている。たとえば60年代の作家達は、6・25という幼少時の傷を意識化させながらも、5・16という当時の惨事を直接的に意識化することはできなかった。これに比べて彼らは、80年代の光州事態を自らの暗い実存として意識化し、これを打破するために正面から向き合った。それは、彼らが自分の世代の問題をそのまま受け止める勇氣と能力をもっていたことを意味する。また、60年代の作家達が、映像媒体の登場にも関わらず、それを利用する術を知らなかったのに比べると、これらの文学は、後期産業化の豊饒さの中で、映像媒体をうまく活用することができた。こうした現実から、90年代の文学が、変化する時代に対処する能力をもち、様々な方向に発展したことを知ることができる。それは、60年代の小説がもっていたモダニズム的伝統と、70年代の小説が発展させたリアリズム的伝統、そして80年代の小説が開発した知識人小説や労働者小説の伝統を発展的、創造的に継承していることを意味する。特に最近になって急速に発達した映像媒体の大衆化は、今日の若者達の生活様式と感覚を変化させた。こうした変化は、すでに衛星放送の普及により文化的な国境の意味が完全に除去されることによって、加速化している。急激な変化をとげる現実の中で、伝統的な文学様式だけに固執することは、読者から無視され、時代に取り残されることになり、「文学の死」をもたらさないとかがざらない。こうした点から、いわゆるポストモダニズムを主張する文学的傾向は、変化した世界に相応する文学的な変化の一方法だといえる。暗黒の80年代の経験をもった人々が、60年代におけるリアリズム文学の主唱者のように、その忌まわしい記憶を忘却のかたに追いやることがあってはならないとして、こうした文学を批判することは正当で

はないだろう。政治的な闘争のために当代の文学を燃やしてしまった過去の記憶から自由たりえないということは、今日のように急激な社会変化の中で、自らのアイデンティティを見出せなくさせる。韓国人にとって、分断の現実はいかに19世紀的な遺物、あるいは冷戦時代の遺物であるが、韓国人が生活している社会は、自動化され無線化された衛星通信と映像媒体の後期産業化のなかにある。私は、こうした変化した世界における生を受け容れ、認めることがリアリスト的な態度であって、過去の暗く辛い記憶に束縛されることがリアリスト的な態度だということではない。

## 7

いわば「感覚の革命」ということのできる90年代文学の持っているこうした特長は、多くの人々の憂慮の対象となっている。それは、全ての価値が速度によって決定づけられる映像媒体時代において、文学が過剰にこの時代に迎合するという認識から出発する。実際、最近、登場してきたPC小説〔デジタル媒体による小説〕は、印刷媒体の文学を映像媒体の文学に変えていくものとして、文学の位相と役割を揺るがしている。文学が、まるで遊戯の対象のように思い通りに変容させることのできる軽いゲームとして認識されている。それは、今まで文学が担ってきた批判と反省の役割を脱ぎ捨てることであり、ともすれば新しい時代の要求に合った自由で、特色のある変化にもなり得る。しかし、そうすることによって、文学が使い捨て商品のような消費財になってしまう時、文学は、後期産業社会の文明の下に陥没していかざるを得ない。理想と現実の葛藤と乖離を把握し、それを克服するための道を模索してきた今日までの文学的役割を、換言すれば、その生産的役割を放棄するということであり、「文学の死」をもたらすことになるのである。さらに、豊かな想像力をもつ若い作家達が、その想像力に新たな「文学の誕生」をもたらすため苦痛に満ちた努力を傾けるのではなく、やれパスティッシュだ、パロディだといって、既存の作品を切り抜き、つぎはぎし、それをポストモダンの作品だと主張する場合、彼らの豊かな想像力は、独創的な世界を独自に作る以前に、過去の想像力に寄生してしまう帰結をもたらすことになる。こうした現象は、新しい想像力を創造的に生かすのではなく、消費してしまうものである。作家が年を重ねて歴史小説を書くのは、若い頃の独自の想像力の貧困を克服するために、歴史的想像力を文化的想像力に転換するためである。ゆえに、若い作家達がパスティッシュやパロディという名で、他人の想像力を変型させて自らのものにするのは、自分の中にみなぎる独自の想像力を用いもしないで捨て去ることであり、すでに存在している想像力に依存するつまらない機械化された模倣にすぎない。彼らの作品がセックスを濫用するのも、まさにこのような怠慢な精神に由来している。こうした点を克服することこそが、21世紀の韓国文学が生き残る道である。さもなければ、文学が他の消費財と異なるところはなくなり、あえて文学を探し求める必要もなくなり、その結果、文学の死をもたらす他はない。映像媒体の創造的利用が文学においてさらに真摯に検討され、達成されなければならない理由もここにある。生の瞬間、瞬間を反映し、問いかけ、考え、よりよい生への夢を見させる文学は存続することができる。しかし、軽くて感覚的でインスタントで遊戯的なところにとどまる小説は、文学を消費財に転落させてしまう。これらの小説は、60年代の文学でみられた哲学的な思惟が不足しており、70年代の文学において確認することのできた社会学的な想像力が十分ではなく、80年代の文学で見られた挑戦的な叙事性も欠如している。こうした彼らの文学は、今日の読者達に合うものではあるが、文学が担ってきた精神的な役割を疎かにする結果を招く。それは、今日の韓国文化が最も警戒しなければならない課題である。